1918年（大正七年）七月廿二日

内村先生は一ヶ月近き長期に亘る北海道伝道を果されたる後のことであるから感謝満足の凱旋たるは勿論のことであるが、心身の御疲労の程も察するに餘りあることである。此際帰京の途中郷里の氣がね遠慮もなき静かな所に休養の時間を供するは肝要のこと考え、私共は敬愛の心を籠めて、先生が平素主の愛を以て同情し居らる池田政代高老婦の開業し居る禁酒主義の旅館（北沢駅前）に御一泊を乞い、夕の祈禱会、食事、入浴、按摩等私共の出来得る限りの優遇を以て先生を喜ばしてあげた。寫真は翌日旅館の前庭に於て撮影せられし。

池田新代	池田松枝
菊池チセ	池田政代
齋藤多新	内村先生
齋藤怎	照井眞臣乳
小田代九人	齋藤宗次郎
池田負子	
池田房一	
齋藤忠吉	